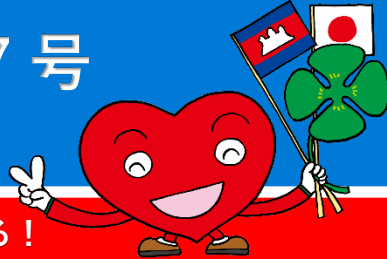


NPO Srolanh Project since 2010

スロラニ通信 第7号

平成 28 年 4 月 3 日発行

カンボジアの支援の必要な子ども達の「生きる」を支援する！



三位一体 ～2016年2月の支援活動を終えて～

歯科医師 大森茂樹



支援という一言の中には、いろいろな内容が含まれている。できる支援は人によって違うので、人それぞれのやり方で、違った色の、違った味の支援が提供される。ぼくはスロラニ歯科部として、ぼくにできる支援をさせてもらっている。提供する支援として、ブラッシング指導（教育支援）、ハブラシ配布（物資支援）、歯科治療（医療支援）の3つを継続していきたいと考えている。

スロラニプロジェクトのメンバーは、大きく分けて3つのカテゴリに属する。福祉・教育・医療の3分野で、それぞれがそれなりにプロ意識を持っていて、互いに刺激を授受し合っている。それはわかっていたことだけど、今回の活動を通じて、より鮮明にこの3者が共同することで大きな力になることを実感した。三位一体という言葉は元来キリスト教の神の教えに用いられていて、内容はよくわからないけど、そこから派生して、「3つのものが、一つの物の3つの側面であること。また、3者が心を合わせること」という意味で使われるようになったという。まさに今回の活動は「三位一体」だった。

そして、この3者はどれもそれぞれの要素を含んでいて、互いに知恵を出しあったり助けあったりすべきで、補い合う関係であることを痛感した。みんな何かが足りないから。スパイスとしてアクセントを与えてくれる存在があると、味がひきしまる。



歯科部の3つの支援で言えば、ブラッシング啓蒙活動は教育、ハブラシを配るのは福祉、歯を抜くのは医療。また、それらを行うためには、事前調整も必要だし、人手もいるし、現場での臨機応変な対応も求められる。違った視点から意見を述べてもらうのはありがたい。

福祉の視点からみた生活支援にも教育を受けさせてやるにはどうすれば、とか、健康のためには何が必要か、とかを考えるし、教育の視点でも福祉や医療を教えていくという役割がある。その他の支援もどれもがちょっとずつミックスされている。裏を返せば、それぞれに「いっちょかみ」ができるわけだ。

こうやって行っている支援活動を何となく色分けすれば、自分に関われそうな支援が見えてくるのではないだろうか。もちろん、すべてのベースとなっているのが経済的支援であることは言うまでもなくて、やっぱりお金は必要で、万能だ。だけど、お金がなくても、できることは必ずありますよってことを伝えたい。

スロラニプロジェクトの活動を通じて、実は自分が元気をもらっていて、支援しながらも支援してもらっている、という人がある。カンボジアだから、自分のことを知る人がいないからできた、ということもある。自らが殻を破るために参加する、というチャレンジなら、そばにいる人にも勇気を与えるかもしれない。きっかけは何にせよ、特別な経験になることは間違いない。

とうことで、ぜひ活動をご一緒しましょう。ぼくは今回5回目だったけど、これまでハミガキしようとするたびに毎回泣いて嫌がっていた女の子が、泣かずにできるようになるなど、新しい感動もあった。次回は何に出会えるかって、今からもう、ワクワクしている。人・モノ・事の三位一体の楽しみが、そこにあるから。



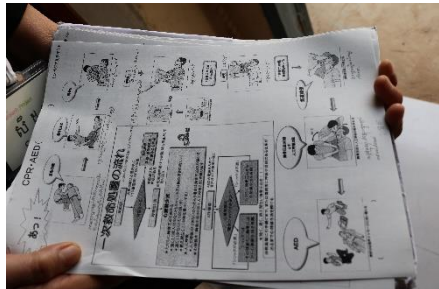
2016年2月救急救命講習報告

救急救命士 高橋茂樹



2013年7月、コムルー村の活動から始まった救急講習も今回のドントロー中学校への指導で9回目、延べ約300名を超える受講者数となりました。

振り返れば、当初は言葉の壁や生活習慣の違い、さらには指導場所の環境など、不安材料がいっぱいの中での出発であった。まずは、日本版のテキストを現地スタッフのパンナさんにお願ひし、その翻訳してもらったクメール語の文字を切り貼りして、カンボジア版テキストを作成。そのテキストを使っの初めての指導のあと、村人から質問で、心臓マッサージ（胸骨圧迫）はいつまで続けられればいいのですかと、日本では救急車が来るまで頑張ってくださいと指導しているが、カンボジアでは？！・・・交通事故では救急車が来ることもあるが、急病で呼ぶことは難しく、頑張っ



続けてくださいと回答するほかなく、現地に合った指導方法が必要であると痛感した。

翌年からは、村人だけではなく、指導者的立場にある、教員や村長を含めた役場職員に対しての講習を実施。この講習はとても有意義な講習で、絶え間ない胸骨圧迫などしっかりと身につけてもらえた。

そして、今回も孤児院年長児と、孤児院のパソコン教室に通う近隣の子ども達への講習は、3回目ということもあり、手技は体が覚えていよう、迷いもなく胸骨圧迫を実施していた。繰り返し今後も外傷処置の方法なども含め指導し、将来成人となり孤児院を出て職に就いたときに、少しでも役に立てればと考える。



今回初めてとなる、ドントロー中学1年生への講習は、55名という受講人数もさることながら、日本では中学生＝思春期というイメージがあり、難しい年代への指導という先入観から講習に不安があったが、いざ始めてみると、先生の指導もよかったのか、みんな真剣に受講して、こちらの質問にもよく手が上がり、通訳をしてきているパンナやメンバーの協力のもと、無事に終わることができた。

今後の救急救命講習の取り組み方については、自分なりに検証し、はっきりとした答えはまだ出てはいないが、方向性は見えてきた。

- ① 孤児院の年長児に対しては、継続的に心肺蘇生の実技と応急処置の指導を実施。良き指導者となるべく知識と技術を身につけてもらい、孤児院退所後、社会に出て少しでも役にたつ人材育成を図る。
- ② これからのカンボジアを背負っていく子ども達、毎年対象となる中学1年生を目標設定の核とし継続して指導。
- ③ 教職員に対しての救急救命講習。

この3つを目標として今後も指導していければと考える。

近い将来、必ず心臓突然死に対しての応急処置が必要となることは間違いなく、AEDも身近なものになった時のためにも、この救急救命講習を続けていきたい。三位一体の、教育支援の一つとして。



スロラニ小学校における特別支援教育～どの子どもわかる学習をめざして～ 須藤徳子



前回（2015年10月）、スロラニ小学校のティーダ先生から授業についていけない生徒に対して、どのようにすればいいのか、また適切な教材があれば教えて欲しいという依頼があったので、その子ども達がどんな場面でのように困っているのかわかりませんが、立ち歩かずに座って学習できるものがあればいいと思い、日本で捜して持って行きました。

ウレタンの型はめ、洗濯バサミ、マグネット貼り等を授業についていけない支援の必要な4人の子ども達に取り組みでもらいました。あまり抵抗なく、困った様子もなく、提供した課題に対して出来るものが多かったです。そして、支援の必要な子ども達が取り組んでいるカラフルな教材を見て、集まって来ていた他のスロラニ小学校の子ども達も、したくてたまらない様子でした。結局、周りで、支援の必要な子ども達に対して、「ああしたらいい、こうしたらいい」と言いながら遂には自分たちがやってしまうという状態でした。



2015年10月 課題に取り組むサローン君

この光景を見て、授業中にこれらの教材を出すと、他の子ども達の気が散ってしまうのではないかと危惧されました。案の定、この度、スロラニ小学校の本校にあたるドントロー小学校に異動になったティーダ先生に「あの教材は使っていましたか？」と尋ねると「他の子ども達が触って散逸して困るので、私の家に置いている」との返事に、「あ～、やっぱり…」とちょっと残念な気持ちになりました。そして全員に同じ具体物があれば一緒に学習ができるのではないかと考えが正しかったと確信しました。日本の小学1年生が必ず使っている算数セットの中から、数の認識や加減学習に使うブロックを人数分集めて今回2016年2月の支援活動の時に持って行こうと考え、保護者をお願いして寄付してもらったものを持参しました。



2015年10月 課題に取り組むパンヤン君

しかし・・・

- ① ブロックが人数分集まらなかった。
- ② 現地の教師にとってたぶん初めてのことなので、事前に教材研究の時間が必要。
- ③ 使ったことがないものなので、学習の前提として子供たちに扱い方を指導する時間も必要。
- ④ 数の学習をどんなふうに進めているのかわからず、現地の教材として適当かどうか不明。

活動の最後日、2年生の算数のテストをしている場面を見る機会がありました。机の上には、板書を写したノートだけ。1問目は、先生と一緒にやったのか、すでに答えが書いてありました。4問の2ケタの繰り上がりの足し算を、すぐにできてノートを提出した生徒もいるが、指を使って考えているこども、全く分からずお手上げでうつぶせになっているこどももいました。また黒板も老朽化が進み、見にくい黒板の字がみんなに見えているのか？1ケタの繰り上がりの足し算が出来ていないこどもに、2ケタの繰り上がりのある足し算は無理ではないのか？筆算ですよう指導はしないのか、⑤番は、答えが3ケタになる

- ① 37+17=54
- ② 46+15=
- ③ 57+13=
- ④ 68+15=
- ⑤ 77+24=



が、大丈夫か？出来ていないこどもにどんな指導をしているのか？教科書は全員持っているのか？等々、疑問で私の頭の中はいっぱいになりました。だからといって、現地にずっといない私が、ブロックを持って行って偉そうに教師に教えていいものか…。私だって、見ず知らずの外国人がやってきて、「あなたのやり方よりこれを使った方がいいですよ」と言われても素直に「はい」と言えないと思うでしょう。やるなら、現地に何日もいる覚悟が必要だ。それには今回は時間が、なさすぎる…。

と、いうわけで、持って行ったブロックは現地の倉庫に置いてきました。その代わりに、シエムリアップにある唯一のデパート“ラッキーモール”の本屋で買ったクメール語と算数のワークブックを現在のスロラニユ小学校2年生担任のトラン先生に見せました。「人数分あれば使いたい」とのことだったので、それを聞いた飯塚代表は早速、帰りの空港に行く前のわずかな時間に、40冊購入して現地スタッフのパンナさんに持って行ってもらったとか。あの、ワークブックで少しでも勉強が楽しく分かるようになればいいな、と思っています。

次回、とりあえず人数分のブロックを集めて持って行ってみようと思います。そして、時間があれば通訳をつけてもらって、先生方とブロックを使った算数の教材研究が少しでもできたら良いなあと考えています。

親父のカンボジア活動報告～60歳からの国際支援～ ネットワークながた代表 石倉泰三



エコバックプロジェクトスロラニユ小学校低学年のこども達に、アクリル絵の具を使って、無地のエコバックに、それぞれ好きな絵を描いてもらいました。絵を描いて表現する事が無かったので、最初は戸惑っていました。僕が、まずエコバックに、「太陽と花と少年」を描きました。それを見て、スロラニユ小学校のこども達が絵を描き始めました。色を混ぜるのではなく、原色を使って、色鮮やかに描いていました。僕が描いた「太陽と花と少年」を描いているこどももいました。中には描けな



ったこどもも数人いましたが、スタッフがそれぞれのこども達の手を携えて、描くことが出来ました。今回、エコバックに絵を描くプロジェクトをするにあたり、子ども達が安全に使える材料を選ぶのに、結構時間を使いました。出来上がった作品を乾かす為、スロラニユプロジェクトを支援してくださっている皆様の寄付金で作った塀に並べると、鮮やかな色彩が風に吹かれて、まるで子どもたちが、遊んでいるように見えました。今回エコバックを提供していただいた、(有)真辺新聞舗様に感謝いたします。世界で一つだけのバックをもって通学するこども達を想像すると何だか温かい気持ちになりました。

井戸プロジェクトバンゴア村で、井戸支援を始めてから、今回で14基目になります。今回、株式会社シークル様の井戸を確認してきました。乾季にもかかわらず、水がこんこんと、湧き出ていました。以前、確認した時よりも、水かさが多くきれいな水になっていました。前回、村の名士であるホーンさんとお会いする事が出来なかったのですが、今回お会いする事が出来、再会を喜び合いました。時間をかけて取り組んできたことに、信頼関係が出来たことを実感しました。異国の地での支援活動には現地の人との確かな繋がりが必要であり、バンゴア村のホーンさんのような人たちをもっと増やしていけたらと思います。



パットくんは、4人きょうだいで、兄と、妹が二人います。以前はアンコールワットの遺跡近辺の親戚がいるスラムに住んでいましたが、両親が亡くなり、親戚もパット君の面倒を見るのが困難になったことから、お父さんと住んでいたシエムリアップの中心街からバイクで5分ほどの集落に住んでいます。私が、パットくと密に付き合うようになったのは、遺跡近辺に住んでいた頃からです。

孤児院センターで、障がい者デイサービスが始まり、体に麻痺があり移動が困難なパット君に私が一緒にトゥクトゥクに乗り、送り迎えをする事になりました。そして、いつも妹のトーンちゃんが、一緒に来ていました。当初トーンちゃんは日本人の私たちになかなか心を開いてくれなかったのですが、徐々にデイサービスなどで会う機会を重ねて、



今回初めて、笑顔を見せてくれて、話しかけてくれました。トーンちゃんは、私の兄パットくんに対する接し方を見ていて、安心してくれたようです。現在、パット君は住んでいた家がボロボロで衛生面でも劣悪な環境であったことから孤児院センターに入所しています。そして、パット君と一緒に住んでいたトーンちゃんも4月のカンボジアのお正月後に孤児院センターにいきたくて希望を言い、入所することになりました。次回、トーンちゃんとの再会が楽しみです。

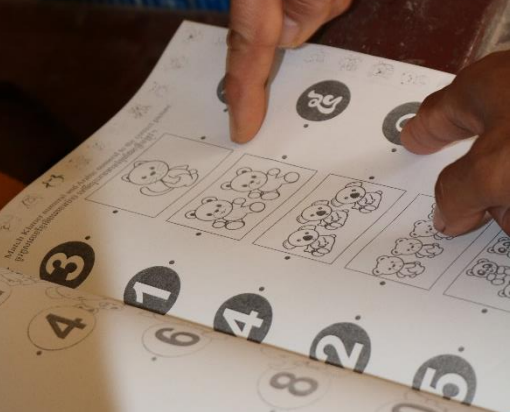
2016年2月スロラニユプロジェクト支援活動に参加しての感想 新居チズ子様

二十数年、途上国支援組織、グループNGOやNPOを支援しています。どこからも丁寧な会計報告を含む活動報告書が届きます。寄付だけではあるけれど途上国の人達を応援しているのだとそこそこの満足があります。

しかし、今回の盛り沢山のメニューが一杯の活動に参加してみて、「そこそこの満足」は消えてしまいました。

子どもたちとお母さん達との交わり、学校現場、村落訪問等は帰ってきて以後途上国がリアルに自分の意識の中に入り込んできて、ときどき揺さぶりをかけてきます。

途上国支援活動のあり方を多角的に考えるようになっていきます。カンボジア支援と言えば、井戸堀が代名詞になるくらいですが、今回井戸を贈った村落を



訪問し村落の実態を垣間見ました。水不足の他に村落の人達が抱える悩み、課題があります。

又、井戸を掘り過ぎて地下水が減ってきているという報告書もあります。

世界有数の観光地となっているアンコールワット遺跡群ですが、そこから一時間も車でいけば近代的な農村社会、人々の生活があります。支援している少年のお母さんは「現金収入がもっと必要なので、日本に働きに行く誘いがある」と。日本とカンボジアの片田舎がシッカリと繋がっているのです。まさしく労働者のグローバル化です。



プロジェクトが支援の対象とする人々、子供たちが生きる地域も国の変貌とグローバル化の中にあるように思います。国の事情、地域の事情そして人々の個人の事情を学び理解しつつ、どのような支援をしていくのか・・・。

様々な問題、悩みと格闘すること十年余、支援の芽が大きく育ったアフガニスタンの支援NPO。ベトナム戦争末期に日本留学中のベトナム人青年が始めた「ベトナム子ども基金」はベトナムの社会で活躍する青年達を育てています。



スロラニユプロジェクトはまだ始まったばかりです。救命法・歯科衛生の話真剣に聴き、笑顔を見せていた中学生達、玉入れや綱引きに興奮する小学生達。孤児院の人なつっこい子ども達。カンボジアの将来はこのような子供達が創るのです。カンボジアの社会に役立つ人に育てる：育成教育を担うプロジェクト！！

望ましい支援には十分な資金がいるのはもちろんです。信頼できる現地スタッフも大切です。スロラニユプロジェクトに賛同する人たちの、現実的な視点・判断力を持った粘り強い協力が一番望まれるかもしれません。

私たちの活動にご賛同頂ける方へ協力をお願い

スロラニユプロジェクトは継続して支援いただく、皆様のご協力によって成り立っています。活動に賛同していただけた方に、スロラニユプロジェクトの会員になっていただき、その会費を大切に支援活動費として使わせていただきます。ご協力お願い致します。

会員の種類	個人	団体
正会員	1口10000円(月会費)	1口100000円(月会費)
賛助会員	1口10000円(年会費)	1口50000円(年会費)

※賛助会員(個人)の年会費につきましては3口からお願いします。



振込先のご案内

○銀行振込
 みなと銀行支店：明舞支店（普） 口座名：特定非営利活動法人スロラニユプロジェクト理事長飯塚由美子 口座番号：3895462
 ○郵便振替
 加入者名：特定非営利活動法人スロラニユプロジェクト 口座記号番号：00980-1-172480
 ※お願い 恐れ入りますが、手数料についてはご負担をお願いします。